

本報告書の要約

第1章 子どもとのかかわり

1. 日ごろのかかわり

1) 子どもとのかかわり

母親は子どもに積極的にかかわり、自分も子どもとともに成長しているという肯定的感情を強くもつ反面、子育てに伴うイライラ感をもったり、子どもを叱る、たたくといった否定的なかかわりもする。子どもにどうかかわるかは、夫の影響が大きい(図1-1~4)。

2) 子どもと一緒にしていること

母親は家庭内で子どもとどんなことをしているのだろうか。圧倒的に多かったのは「話をする」「一日の出来事を聞く」であった。早期教育にあたるようなことをしている母親は少なく、とくに英語やパソコンにかかわることは少なかった(図1-5・6)。

2. 子どもの態度・様子

母親は子どもの様子や態度を比較的肯定的にみている。男女別にみると、男子は落ち着きがなく、女子はがまんづよいと認識している。出生順位別にみると、第1子は落ち着きがなく、第2子以降は運動神経がよいと考えていることがわかった(図1-7~9、表1-1)。

第2章 子育ての悩みとしつけ

1. 子育ての悩みや気がかり

子育ての悩みや気がかりは、「犯罪や事故に巻き込まれること」が第1位で、食生活の悩みやしつけの方法、友だちとのかかわりが上位を占めた。同じ園児をもつ母親でも幼稚園と保育園では子育ての悩みや気がかりに多くの相違がみられた(図2-1~4、表2-1)。

2. 子育ての一番の悩みや気がかり

子育ての一番の悩みや気がかりでも、他を引き離して「犯罪や事故に巻き込まれること」が第1位であった。複数回答では第9位だった「子どもの性格、現在の態度や様子」が第3位にあがり、また上位10位中2項目で母親自身のことが最大関心事としてあげられていた(図2-5~8、表2-2)。

3. しつけ・教育の情報源

しつけ・教育の情報源は、友人、家族、園の先生、マスメディアなど多岐にわた

る。とくに、幼稚園児の母親は数多くの育児情報を収集しているが、保育園児の母親はいくつかの限られた情報源を集中的に活用している(図2-9~11)。

4. 信頼するしつけ・教育の情報源

さまざまなしつけ・教育情報源のなかから、とくに信頼する人として、友人たち、自分の親、園の先生、配偶者などが上位にあげられた。また、母親は子育ての悩みや気がかりの内容によって情報源を選定していることも明らかになった(図2-12・13)。

5. 家庭でのしつけ・教育方針

子育てをするうえで心がけていることとしては、人とのコミュニケーションを重視した社会的な協調性、家庭のなかでの自立心を養うことが上位にあげられていた。母親の就労状況によって、しつけ・教育の力点が異なっていた(図2-14~16)。

6. 幼稚園・保育園の選び方

園選びで重視することを選んでもらった結果、選択数が多いのは幼稚園児、第1子、年少児の母親であった。内容としては、知育関連の項目より「家から近い」「雰囲気が良い」「評判が良い」「親の通勤に便利」「長時間あずかってくれる」「給食がある」などが優先されていた(図2-17~19)。

第3章 日ごろの生活習慣

1. 自分一人のできること

発達とともに自立度が急速に高まる生活習慣がある一方、年長児になっても一人でできず、いつまでもしつけの課題であり続ける項目もある。おおむね女子のほうが自立度が高い(図3-1~3)。

2. もう少し自分でやってほしいこと

「あと片づけをする」「あいさつやお礼を言う」などの習慣をもう少ししっかりと自分でやってほしいと思う母親が多い。第1子のほうが第2子以降よりも、そして男子のほうが女子よりも、自立した生活習慣を形成してほしいと思われる(図3-4・5)。

3. 生活習慣やしつけの満足度

子どもの生活習慣やしつけ状況への満足度は1997年調査とあまり変わっておらず、7割が満足している。女子、そして、第2子以降の母親のほうが満足度が高い。これも前回調査と同じ結果であった(図3-6~9)。

第4章 子どもへの期待と習い事

1. 子どもの将来

1) どのような人になってほしいか

母親が子どもの将来に期待するのは何よりもまず心身の健康、思いやり、他人に迷惑をかけないなどの心身や人間関係の健康についてである。これに対して、一流大学を卒業すること、リーダーになること、社会奉仕、国際的に活躍することなどへの期待は低い。また、個性的な生き方を期待する割合もきわめて低い。経年比較では、6年前と比べて今の母親は「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」になることへの期待が強まっている。そして反対に、意思をねばり強く主張したり、夢を持ち続けたり、誠実で責任感があることなどへの期待が低くなっている(図4-1~3、表4-1)。

2) 希望する進学段階

「四年制大学まで」は49.7%、「大学院まで」が2.9%で合計すると全体の5割強、52.6%が四年制大学以上を期待している。性別では、女子のほうが高学歴を期待する割合が低い。6年前と比べると母親たちの高学歴期待はおよそ1割も低くなった。

小学校受験については、「させない」が81.7%、「させる」はわずか1.8%、「まだ決めていない」が15.8%であった(表4-2・3)。

2. 塾・習い事・通信教育

1) 塾・習い事・通信教育の利用率

母親が専業主婦だと子どもを塾や習い事に通わせる傾向が強い。学年別では年長が、幼保別では幼稚園の母親で通わせる割合が高い。この結果、幼稚園の年長がもっとも利用率が高く、4分の3以上の園児が利用している(図4-4、表4-4~6)。

2) 現在している塾・習い事・通信教育

6年間で、芸術系の習い事が減少した。また、「英会話などの語学教室や個人レッスン」がおよそ7ポイント増加して13.0%になった。習い事をしている割合は学歴期待との相関が非常に強く、学歴期待が高い母親の子どものほうが学歴期待が低い母親の子どもよりも利用率が高い。開始時期は、スポーツ系と芸術系の学習機関では4歳が開始年齢のピーク、家庭内で行う通信教育や教材・教育セットの開始は早く、0歳または1歳がピークである(表4-7・8、図4-5・6)。

3) 教育費

園外教育機関への教育費の支出は10,000円未満が全体のおよそ3分の2。幼保別では、幼稚園は保育園よりも園外教育機関への教育費の支出が多い(図4-7)。

3. 小学校に期待すること

幼児の母親は学校に対して学力や能力の育成をあまり期待していない。母親が小学校に対して望む指導や取り組みの上位にくるものは、こころ、道徳、規則の指導、あるいは内面的成長の指導であった。反対に、望む割合が少ないのは、学力やさまざまな能力に関する項目である。具体的には受験学力、コンピュータ、芸術面、英会話、スポーツ能力・体力向上などへの要望が低かった(図4-8、表4-9)。

第5章 子育てと母親自身の生き方

1. 生活の満足度

生活満足度は、全般的に高い。しかしながら、「母親として」満足している割合は、専業主婦75.9%（かなり+まあ満足している）に対し、常勤66.4%（同）となっている（表5-1）。

2. 配偶者との関係

配偶者とお互いの関心事について話し合い、「あなた自身」について理解してくれていると思えるような関係、「子育てに協力的」であると思う関係を、夫婦が日常的に作り上げ維持していることは、かなりの期間にわたって継続する子育て生活にとって重要である（表5-2-1~3）。

3. 子育ての楽しさ

多くの母親が子育てを「楽しい」と感じているが、配偶者に理解があり、子育てに協力的であると感じていることによってその「楽しさ」は高まる。子育てを「とても楽しい」と感じているのは、常勤の仕事をもつ母親たちである。一方で、「子育てしながら働くことの負担感」は、常勤がもっとも高い（図5-1~3、表5-3）。

4. 子育てに対する意見

子どもの可能性を信じて、子ども自身の考えや関心、興味を優先することを重視する考え方が強いなかで、「子どもが嫌がっても、小・中学校は無理にでも通わせるべきである」といった相反する考え方も根強く支持されている。経年比較では、「子どものためには、自分が犠牲になるのはしかたない」という自己犠牲的な母親像を肯定する割合が高まっている（表5-4、図5-4）。

第6章 子育て生活の地域差

1. 地域別属性

郡部では、多くの母親が「パート」か「常勤」であり、6割以上が何らかのかたちで働いている。また、郡部では、半数近くが「三世帯同居家族」である。さらに、父親、母親の平均年齢はともに、首都圏、郡部、地方都市の順番で高い（図6-1~3①②、表6-1）。

2. 子どもとのかかわりと悩みや気がかり

郡部では、約7割がほとんど毎日、「家族みんなで食事をする」と回答しており、首都圏や地方都市と比べるとその割合は15ポイント以上も高い。また、子育ての悩みや気がかりは、どの地域でも「犯罪や事故に巻き込まれること」が第1位であるが、地方都市で「しつけのしかた」が他の地域に比べて高いのが特徴的である（図6-4・5）。

3. 教育選択

幼稚園・保育園選びの際には、首都圏、地方都市では約7割の母親が「よく考えた」あるいは「まあ考えた」と答えているが、郡部では44.6%にとどまる。また、将来、子どもに希望する進学段階は、首都圏、地方都市では「四年制大学まで」以上を希望する割合が高い(図6-6・7)。

4. 習い事

首都圏、地方都市では習い事をしている割合は5割以上だが、郡部では3割にとどまる。習い事の内容は、首都圏と地方都市では大きな差はないが、その両地域と郡部は大きく異なる。「英会話などの語学教室や個人レッスン」を郡部でやっている割合は、首都圏の4分の1である(図6-8・9、表6-2)。

5. 母親の満足度と子育ての楽しさ

子どもの生活習慣やしつけの状況に対して、首都圏、地方都市、郡部とも6割以上の母親が「満足している(とても+まあ)」と答えている。また、どの地域でも9割近くの母親が子育てを「楽しい(とても+まあまあ)」と感じている(図6-10~12)。

第7章

子どもの学年による子育ての違い

1. 年少児(3歳児)

年少児は、年中児、年長児と比べて衣食や排泄といった基本的な生活についての自立が十分ではなく、そのことを気がかりにする母親が多い。また、幼児的な行動から、子どもをわがままで乱暴と認識する割合が高い。しかし、年少児の母親は、話す・聞くといった基本的なかかわりを「ほとんど毎日」する割合が高く、子育ての不安感も相対的にみて低いのが特徴である。

2. 年中児(4歳児)

年中児になると、基本的な生活技術に加え、公共の場で騒がない、約束を守るといった周囲や相手との関係性を考慮した行動が急速にできるようになる。悩みのなかでは、親子関係や子どもの友だち関係などが複雑になって、人間関係の苦労が増える様子がうかがえる。この時期は、学習にかかわる働きかけや習い事をする割合などが増加するのが特徴で、6割弱の子どもが何らかの習い事をするようになる。

3. 年長児(5歳児)

年長児になると、食事や排泄といった基本的な生活技術についてはほとんど一人でできるようになり、年少児、年中児と比べると、これらの悩みは減少する。しかし、四人に一人の母親が「小学校入学前の準備教育」を気がかりに思っているなど、進学面での不安が増える。子どもの様子を見ていて感じる不安感も、成長にしたがって高まる傾向がある。7割弱の子どもが何らかの習い事をしており、1か月の教育費の平均額も7,000円弱となる。